

---

# いつか貴女の花になる

天帆出

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか貴女の花になる

### 【Nコード】

N0095D

### 【作者名】

天帆出

### 【あらすじ】

大学で知り合った翔子と真澄。二人の少女のすれ違いとその結末。

## 01（前書き）

微同性愛傾向

反モラル傾向

以上二点ご留意ください

アパートの裏の雑木林で蛙が一斉に鳴きはじめた。

つい先週末までは手も足も出ないおたまじゃくしだったくせに

……

この連中の声が響きはじめるとじめじめした蒸し暑い季節がやってくる。翔子は低い窓のさんに腰掛けてカップの底に一口程度残ったコーヒーを薄暗くなり始めた夕暮れの林に向って投げ捨てた。

「ぱしゃ」という、葉がコーヒーを受け止める軽い音の後、一瞬だけ蛙の合唱が泣き止むが、僅か数秒もしないうちにまた『ぐわ、ぐわ』とも『ぐえ、ぐえ』とも表現しがたい声が戻ってくる。

「何イライラしてるの」

台所と部屋を仕切る曇ガラスの薄い戸に寄り添うように体をもたれさせ華奢で小柄な少女がくすくすと微笑みながら声をかけてきた。

「いつの間に来てたの？ 玄関、開いてた？」 床板の軋む音もしなかった。

突然現れた来訪者に気付かないまま、蛙に向ってやつあたりのようなことをしてしまった姿を見られて、バツが悪そうに目を背けながら窓を閉める。

少女、伊藤真澄は翔子の問には答えず、透けるような薄く柔らかなワンピースをひるがえしながら空になったコーヒーカップを覗きこんだ。

「珍しい、インスタントじゃないんだ」

目を細めてカップに顔を近づけ、クンと鼻を鳴らす。

「せっかくコーヒーマーカーがあるんだもん、たまには使ってやんなきゃね」

「佐々木さんがパチンコで取ってきたやつ、ね」

半年以上も昔に自分と別れた男の名前を出されて翔子はムツとし

たように口を尖らせる。

「いいじゃない、関係ないでしょ」

「うん。関係ないんだけどね。何で半年以上も経って引っ張り出してきたのかなあって」

真澄はまたくすくす笑うようなからかい口調で喋りながらポットに残った僅かな褐色の液体を薄ピンクのマグカップに注いだ。

翔子のアパートは実家と大学のある街から随分遠い。

電車一本で行ける場所だが、その両方が在る賑やかな街に背を向け、急行も快速も途中駅からは全て各駅停車になってしまいう路線を、ただひたすら静かな里に向って走る電車に乗って片道約一時間強。

駅を出て『セレブな田舎暮らし』が売り文句の住宅街が展開する小高い丘に向って坂を登る。その坂の途中、人気も民家も途切れるほんの僅かな通りを少し脇道に逸れて、周囲を林に囲まれた小さなアパート。バスに乗るには中途半端な距離を二十分かけててくると歩く。

誰にも煩わされることのない場所で一人静かに絵を描く環境が欲しかった。家族とも、ふいに訪れる友人たちとも、たいして必要と思えない会話に心乱されることなく、また、自分の描いている絵を覗かれ無責任な批評も聞かされることのない、ただ通学と寝食と僅かなバイトと絵に没頭する為の環境。

絵を描くことは好きだったけれど才能に関しては高校三年の夏、進路を決める段階で諦めた。だから普通の大学に入り適当に資格など取りながら就職するまでの四年間、未練が無くなるまで思う存分絵を描くことに可能な限りの時間を捧げたかった。

「就職なんてしちゃったらそうそう好きな事ばかりなんてやってられないもんね」

溜息混じりに呟きながら偏差値と両親の希望を照らし合わせた学校を受験した。

翔子は何とはなしに空のカップを両掌でくるむように抱え込んでぼうつとしていると

「で？ 翔子は何イライラしてたつての？」

屈託のない笑顔で小さな顔の中に体裁よくまとまった大きな瞳が覗き込んできた。

「別に」

無愛想に答えて話を変えてみる。

「それより真澄こそ、ここんとこずつとうちに泊まりこんじゃってるけどそろそろ家の方に顔出した方がいいんじゃないの？」

「別にい」

つつけんどんだった翔子の返事を真似しながら、けれどからかう口調は変わらない。その態度に呆れながら、しかし嫌いにはなれず「まあいいわ……」

ふつと軽く息を吐きながら空のカップと一緒に台所へ向う。

「ねえ、晩御飯はどうするの？」

コーヒーの匂いのすっかり消えてしまった器具とカップを洗いながら、隣の部屋で大人しく文庫本を読みはじめた真澄に声をかける。

「んつとー……いいや……」

何の本を読んでいるのやら、歯切れの悪い答え。

やれやれ……

じゃあ自分一人でも食べようかしら、そう思いながら冷蔵庫を開ける。実家の母親が見たら叫びだしそうな殺風景な庫内。本来卵が在るべき場所に大きな顔をして横たわる筆にペインティングナイフ

…… e t c ……

ラーメンでいいか

お湯を沸かしインスタントラーメンの袋を開け麺を入れ、食欲をそそる匂いが立ち上り始めても真澄は椅子にしがみつき本に向い続けぴくりとも動かない。

中肉中背でダイエットの必要はない程度に柔らかくふくよかなこ

く普通の女性体型をしている翔子に対して、まるで霞でも食べて生きていくんじゃないかと思ってしまう、指先が触れただけで砕け散ってしまうような小さい小さい真澄。

童話や剣と魔法の幻想小説などに出てくるような、背中に羽を生やした空想上の生き物を連想してしまうその外見に惑わされる人間は少ない。

翔子はラーメンをすすりながら曇ガラスに映る真澄のお人形のようなシルエットをぼんやりと眺めていたが、ふっと、水切りに放り込まれたコーヒーマーカーの部品に視線をずらす。

別に、佐々木先輩と別れたのはアンタが原因なんかじゃないんだから……

鍋と井を洗って台所をきれいにすると、いくらか気分も切り替わった。

絵の続きでもやつつけるか。

真澄は一度本に没頭してしまうともう、ちょっとやさつとじゃ動かない。静かになってちようどいいわ、と部屋に戻り木炭で下描き中のカンバスに向う。

翔子の絵に全然感心を示さずカンバスを覗きもしないので真澄は気付いていないが、ここ一年以上、描き続けているのは全て彼女の肖像だ。数冊のスケッチブックも様々な角度から見た一人の少女で埋め尽くされている。時にそれは瞳だけを幾つも描いてあったり、手だけ、スカートから覗く足だけ、というページも多い。

高校時代は風景でも静物でも人物でも、何でも選ばず描いてきたが、大学も問題なく二年に進級し、初めて受けた講義で真澄と知り合ってからというもの何故だか他のモノを描く気が起きなくなってしまった。

それからずっと翔子にとって絵を描く対象は真澄だけ。

カンバスの中で遠い空を見上げる後姿の真澄。細い髪が風になびく様子を捉えるのに必死で線を流し描き続けた跡。そのカンバスに隠れるようにして被写体を盗み見た。

佐々木と翔子が知り合ったのは、学食で古いファンタジー小説を読みながら昼食をとっていた翔子に一学年上の先輩が話し掛けてきた、というものだった。

佐々木は翔子が手にしている本に強い興味をしめしてきた。話を聞けば、あまり有名にならないまま十年以上に絶版になってしまった小説らしく、しかも本屋でも多くは流通されなかった。今ではインターネットのショッピングでも入手不可能な本らしかった。

いつものごとく真澄を描くのにか丁度良いテーマはないかと自宅に戻り、子供の頃買った本を数冊持つて来ていた、その中の一冊だった。

中学で油絵を始めて、こうした小説の気に入った部分をモチーフに描くのが好きだった、そんな翔子の話が佐々木は面白いと言った。「自分で話を創ったり書いたりするわけじゃないけど本を読んで批評したり話し合ったりするのは好きなんだ」佐々木は自らをそう語った。

二人の逢瀬はもっぱら学校の中のみで、外で会う、どちらかの部屋を訪ねる、という話はまったくなかったが、昼食時の学食でほんのひとときを楽しんでいた。少なくとも翔子は。

その初々しい付き合いに真澄はちゃちゃを入れてからかう。

「ねえ、佐々木さんの部屋とか、興味ないの？」

「たまにはさ、外で食事とかしようって思わないの？」  
「しまいは」

「佐々木さん文芸サークルに入ってるって言ったけど、ホントかなあ？ お昼に会う以外のあの人のこと全然知らないんでしょ？ 翔子ってば何か騙されてるんじゃない？」といったぐあいに。

「いいじゃない、悪い人じゃないわよ」



「まあね、学食でいろいろ奢ってもらってるから、あんまり悪い事言うわけにいかないしねえ」

ふふつと笑う真澄に力強く佐々木を「良い人」と言い切れないのは、つい先日佐々木と同じゼミを受けているという女性から聞いた話のせいだろう。

「佐々木君があなたにくつついてるのは伊藤真澄が目当てだって、解ってる？」

緒方茜と名乗った彼女は講義を控えた教室で忍び寄るように翔子の隣に座ったかと思うと、いきなり話をきりだした。

「伊藤さん、あの子ね、ちょっと有名だからね」

確かに真澄は校内でもとびきり有名な少女だった。人間離れた美少女ぶりと浮世離れた風体。彼女とお近づきになると声をかける男性が冷やかな目でちらつと睨まれ侮蔑するような「悪いけど」そのたった一言で玉砕していくのを翔子は彼女の近くにいたせいで、何度となく見てきた。

「将を射んとすれば、てやつよね」

茜の翔子を見つめる眼差しが気の毒そうに、と語る。

「あなたは……佐々木先輩の？ それとも真澄に何か恨みでも？」  
不愉快なその視線に反論をしたつもりだった。しかしそれはさらにと流され肩透かしをくってしまう。

「私？私は……貴女の味方よ。翔子さん」

講義開始のベルが鳴る直前に席を立ち

「あの子は、どうやって翔子さんにそんなに気に入られることができたのかしらねえ」

意味深とも思える不可解な言葉を残して教室を出て行った。

どうやってって

翔子は真澄と出会って、話をするようになったきつかけをよく覚えていない。気が付けば廊下を並んで歩き、たいした話をするわけでもなく昼食を共にし、いつのまにかアパートに入り浸るようにな

っていた。事実お互いに交わした会話の内容もどんなものであったのか、殆ど印象にない。一つだけあるとすれば

「翔子って私のこと何にも聞かないのね」

え？ と思った。

まるで自分が真澄のことに関心がないかのような言い方。そしてその後で「ふふ」と柔らかに笑った表情。

関心なら充分あった。しかしそれは私生活や過去に立ち入るようなものではなく、徹底した被写体としての関心。初めて真澄の存在を知り、彼女を描きたいと思い盗み見ながらスケッチしていた。

その視線に気付かれたのかもしれない。

そうだ、私から話かけたりしたわけじゃなかったもの。

その視線の感触が嫌なものなら真澄は近づいてこなかっただろう。そしてそれがどんな気持ちを生んだのか真澄は何も語らない。だが自分を見つめる視線の主に対し、通りすがりに自然な挨拶を交わすうちお互い近寄っていった、そんな感じだった。

茜の話は確かに思い当たるフシが無いわけではなかった。

佐々木は何かにつけよく学食でご馳走してくれた。コーヒーに昼食、ちよつとしたスナック類、「パチンコで勝ったから」と大学前の店でケーキを買って来てくれることもあった。コーヒーメーカーを「パチンコの景品で取ったから」と豆と一緒にプレゼントされた。そしてそれはいずれも『真澄と一緒にいる時』だった。

そんな佐々木の態度に真澄はいつから不信を抱いていたのだろう、そして不愉快に思っていたのだろう。佐々木に話し掛けられても無愛想に上の空でろくな返事もなかった。

アテが外れた。翔子と親しくしていても真澄の気を引けるわけじゃない。それどころか真澄の態度はどんどん頑なになってゆく。「ちつ失敗したな」誰に言うともなく佐々木はやがて学食に顔を出す回数も減ってゆき自然二人から遠のいていった。

「だから私言っただのに、あの人感じ悪いよって」

「そんな事言わなかったよ、真澄」

「そうかなあ言ったような気、するんだけど」

ふうん、というどこか聞き流しているような返事。

「それにしてもあんな曖昧な態度の人と三ヶ月？学校の中だけとはいえ、よく付き合ってたねえ」

「だって……」

言いかけて飲み込んだ言葉。曖昧な態度なら自分にもあった。

「ま、あんまり深い付き合い要求されなくて楽だったんでしょ、翔子も」

見透かされた？ 翔子はどきりとして真澄の目を見る。

「アパート来られたり色んなことに口挟まれるとめんどくさいけどだもんね、男は。そうなると私も翔子のトコに居づらくなるしさ」

軽いふわふわとした相変わらずの口調だが付き合いが長くなってくるとそれなりに真相をついたことを言ってくる。翔子はそのきれいな唇から零れる言葉をどきどきしながら聞いた。

確かに自分の生活にまで立ち入ってこない佐々木との付き合いは気楽で居心地が良かった。真澄の言うとおり、アパートにまで来られる関係になってしまったら絵を描き続けることにも影響してくる。しかし人並に異性との付き合いにも興味はあった。だから佐々木が本音と下心を隠しているように思えてきてもそこには目を塞いで付き合っていた。

「ああ短い春だったなあ」

溜息をつく翔子に

「まあたそんなこと言って。どうせ翔子だって興味本位程度の付き合いだったくせに」

真澄はくすくすと笑ってみせる。

その佐々木との終わりから、約半年。

翔子は絵を描きながらいつのまにかうつととしてしまったらしい。時計は午前四時を指していた。真澄がかけてくれたのだろうか、毛布が肩からぱりと落ちる。

「真澄？」

返事は来ない。眠ってしまったのなら自分のベッドか、その横に布団を敷いて寝ているはずだがそこにも姿が見えない。

「帰ったのかなあ」

カーテンを開けると外はうつすらと蒼みがかって明るい。台所に向かいコーヒーマーカーをセットしながらテーブルを探すが書置きの一つもなかった。

「最近神出鬼没なんだから」

コポコポと落ちる水音を響かせほろ苦い香が部屋に立ち込める中で、翔子は一人腑に落ちない気持ちを褐色の熱い液体で流し込んだ。

「最近あの子見かけないけど？」

教室に向う廊下で背後から捕まえるように、茜が翔子に話し掛けてきた。

彼女はあの佐々木に関する話をしかけてきた日から何かと声をかけてくる。といっても通りすがりに挨拶をする程度だが。そんな茜のことを真澄は「馴れ馴れしい人」と細めた目尻を尖らせ耳打ちしてきた。どうやら彼女は真澄にとってあまり気に入らない種類の人物らしかった。

「あなたたちが一緒にいる所もあまり見かけないし。喧嘩でもしたの？」

「先輩には関係ないと思いますが」

真澄の耳打ちが利いたのか佐々木の一件のことであつてか態度が尖つてしまう。

「まあそんなに睨まないでよ」

つつけんどんな態度も柳に風という感じで擦り寄ってくる。

「それにね」

翔子のすぐ耳元、唇が触れる感触が解つてしまふほどの距離で茜は囁いた。

「先輩じゃないわ、茜よ、緒方茜」

息が触れた耳元からぞわぞわとする甘つたるい声が首筋を経由して背中を真つ直ぐ降りていった。

「気持ちの悪いことしないでください！」

身を反らし茜の唇から顔を離しキツと睨みつける。しかし茜は翔子の怒鳴り声もものともせず唇の端を少しだけ上げ目を細めて何事もなかったように薄く微笑み話を戻した。

「あの子、困つたことになつてなければいいわね」

「どういう意味ですか？」

「さあ？ 随分色んな男の子に目をつけられたり恨まれたりしてたから、姿が見えないと心配になつちゃうでしょ？」

心配と口で言いながら本心はどうだか怪しいものだ。

「真澄なら夕べも……」

「夕べ？」

茜の細い目尻がぴくりと跳ね上がった。

「あなたたち夜会つたりなんかしてるの？」

甘つたるさが消えた詰問するような強い語尾に驚いて後ずさる。

「何でそんなこと聞くんですか」

脅える目でしかし負けじと噛み付くように聞き返す翔子の態度にハツとして目尻を緩める。

「そうよね、あなた達仲良かったものね、夜会つてたつて何もおかしいことなんかないのよね」

何が言いたいのか、まるで茜の真意がつかめない。戸惑う翔子の

耳元にまた唇を近づけて

「あの子、あんまり休んでると単位も危ないんじゃない？ ホントいろいろ心配ね」

耳たぶにふつと息を吹きかけるように囁いて言い返す暇も与えずにさつと離れ、翔子がびつくりしたように慌てて耳元を押えるその反応を楽しんでいるかのように「ふふ」とまた薄く笑ってくるりと背を向けた。

「何なの、あの人……気持ち悪い……」

しばらく呆然として動けないまま茜の背中を見送っていたが廊下の角を曲がりすっかり見えなくなってしまうとやつと落ち着きを取り戻し、先ほど茜に聞かされた話を頭の中で反芻しはじめる。

「真澄が最近学校来てないって？ そういえば確かに校内ではずっと会ってない気もするけど……」

夕べも確かにアパートで会った。自分が蛙の鳴き声にイライラしている時、いつのまにかやって来て寝ている間に音も無く姿を消した。

「確かに学校では会ってないけど、部屋にはいつも……」

ふつ、と奇妙な違和感が湧き上がる。

「夕方うちに来るのはいいけど、真澄、あんな時間にどうやって？」

うとうとと眠ってしまう前、最後に時計を見た時は深夜一時を過ぎていた。駅まで行くバスはとづくにない。歩いて行ったとしても始発の電車が出るのは五時二十分。一人で薄暗い駅の中電車を待ったのか？

そういえばここ数日ずっとそのパターンの繰り返しだった。雨の日も夕方いつの間にか姿を表し深夜いつの間にか消えている。

あの近所でうちの他に立ち寄れる所なんてあの子無かったはずだけど……

考え始めると奇妙な事は他にもたくさんあった。

部屋に現れて幾つかの会話を交わしたきり、本を手を取ったが最

後まるで人形のようにぴくりとも動かずにそのまま没頭してしまう。同じアパートの一室で同じ空気を吸っていながら何日だか、食事と一緒にした覚えがない。

あんな大人しい人形みたいな子じゃなかったのに。

胸の中で何か薄暗い物がぞわぞわとざわめきはじめる。

「とにかく帰らなきゃ」

まだ講義は幾つか残っている。しかし急いで帰らなければという気持ちで翔子をはやしたてる。

電車を待っている時間がまどろっこしい。一時間の道のりが胸に広がりはじめた不安をさらに煽る。

確かにこの数日間、真澄はおかしかった。

頻繁にアパートへ立ち寄ってはいたがこんなに毎日連続して来ることは無く、四〇五日に一度はきちんと家で夜を過ごしていたし、夕食も確かにあまり食べる性質ではなかったがそれでも翔子が食事をする時には付き合っつてにサラダとご飯程度は食べていた。

「翔子ってば私の好きな物作ってくれないんだもん」

そう言いながら翔子の嫌いなセロリや玉葱を自分で買って来て薄切りにして自分でドレッシングを作り、小さな口に運びながらしやりしやりと軽い音を立てていた。

何か家に帰りたくない理由でもあったのだろうか？

食事も喉を通らないほど悩んでいることがあったのか？

相談したくても言いたくても口に出せずにいる何かがずっとあったのか……

今まで、真澄と部屋で過した時間、学校で一緒にいた時間を考えると他の誰よりもずっと傍にいたと思っていた。しかし考えてみれば翔子の事をあれこれ詮索されなかった代りに、彼女自身の話を聞くこともなかった。今更だが真澄の家族構成すらまともに知らなかったことに呆れてしまう。

確かに煩わしくなく心地良い関係であつたが、お互いの事にまるで関心のないただの通りすがりと何も変わりのない関係。

一年以上もつるんでたのに、これじゃあ……

帰路に焦る翔子の脳裏に茜の薄い微笑みが蘇る。

これじゃあの人がずっと真澄を知ってるみたいじゃない！

頭の中に浮かぶ茜の微笑みを真つ赤なペンキで塗りたくってやりたい、理解に苦しむ醜い感情。

『あの子、困ったことになってなければいいわね』

さらに不安を煽る茜の言葉。

嫌な女！ 嫌な女！

電車の椅子の背もたれに背中をどっぷり預けて目を閉じる。脳裏を支配する茜の顔と言動と不安を追いつきに、両手の指を膝の上で組んでぎゅっと握る。

「……真澄……」

小さく小さく呟いた。

改札を走り抜けるとそのまま駆け足でアパートに向う。一時間に一本あるかないかのバスを待つより走った方が速い。途中息が切れ立ち止まり大きく深呼吸をしてまた走りだす。長い坂の途中に突然現れる細い脇道。その奥にひっそりと建つアパート。

鍵を出し穴に鎖しノブを回すのももどかしい。

「真澄、来てるの？」

おそらく、翔子がこの部屋に住み始めてドアを開けた時に言葉を発するのはこれが始めてに違いない。「ただいま」も「行つてきます」も必要のない一人暮らし。合鍵を渡していない真澄が翔子の居ない間に部屋へ入ることはありえないと解っていながら声を張り上げる。

「真澄？」

案の定、台所にも部屋にも真澄の姿はない。

気が抜けたように机に鞆を放り出し椅子にどさっと腰を下ろす。溜息をつきながらぐるりと見回す見慣れた部屋。



違和感。

夕べ真澄はこの椅子に座って本を読んでいた。  
違和感。

台所でラーメンを食べている時、曇ガラスに映った華奢なシルエ  
ット。

違和感。

何かが、おかしい。奇妙さが立ちこめる部屋。

「……ますみ？」

椅子から立ち上がり本棚に向う。

夕べ彼女が手にしていた本はどれだろう？ 並べられた文庫本の  
背中をなぞる人差し指の先に薄く埃がひっかかる。本棚と本に積も  
った埃がもう長い間その場所に触れる人間が居なかったことを言葉  
無く語る。

指先の埃を払いながら台所へゆっくり向う。安普請の小さな食器  
棚、並べられたカップと食器。薄いピンクのマグカップを手取る。  
真澄が勝手に持って来てこの部屋で愛用していたそのカップの底に  
もうつすらと埃が敷かれている。

「夕べもこれ、使ってたわよね」

昨日の夕方真澄の手の中でポットに僅か残ったコーヒーを受け止  
めたのは確かにこのカップだったはず。

しかし思い出そうとすると記憶は曖昧になってゆく。

夕べの真澄はどんな服を着ていた？ 何を話していた？ 何の本  
を読んでいた？ どんな顔を、していた……？

翔子は冷たい台所の床にぺたりと座り込んでしまった。

「昨日も来てたわよね？ 真澄」

だが、部屋の中の家具も本棚も長い間使われていない真澄用の布  
団の埃も、全てが翔子の記憶を否定する。

虚ろに座ったままの翔子の目の前に白い細い足がふわりと現れた。

「こんな所で何しちゃってるのよ」

上から大きな瞳が覗き込む。

「真澄！」

「なあに？ 大きな声出して」

「良かった……良かったあ。学校で嫌な事聞いちゃって、ずっとずっと心配だったのよあ」

部屋中の全ての物証が彼女の来訪を否定していても、今確かに、彼女はここに居る。翔子は今までの記憶の奇妙な違和感を溢れてくる涙と一緒に流してしまおうとした。手を伸ばし彼女を抱きしめようと体を起こしたその時、からかうようないつもの真澄の軽い笑顔が消えた。

「翔子、嫌な匂いがする」

目尻が上がり口の端がへの字に歪み白い顔が蒼く染まって行く。

「真澄？」

「佐々木さんと別れたと思ったら、今度は何？ この嫌な匂い。何？」

「匂いって？ ああ、もしかして……」

指摘されて初めて気がついた。昼間茜に擦り寄られた時に香水が移ったのだろう。

「そんな、変なこと言わないでよ。これは……」

説明しようとする翔子の口を睨みつける視線で遮った。

「翔子、あなた、私を好きだったんじゃないの？」

「好きって……何言って……真澄？」

「私の事好きだって……って、……私……」

真澄の声が途切れ途切れになってゆく。

「真澄？ 大丈夫？ 真澄？」

真澄の変貌振りに驚き肩を抱き寄せようと手を伸ばした。が、手は華奢な体をすり抜け宙を舞った。

「……………じゃ足りな……………して……………の？」

細い体が色を失い、頼り無さを増してゆく。背にしていた冷蔵庫が透け始める体の向こうから見え始めた。

「真澄？ 真澄！？」

叫びながら真澄の体に触れようと手を振り回すが何一つ掴めないまま空を切る。ぼろぼろと大きな涙をこぼしながらやがて少女の姿は儚く消えていった。

「これは…………？ 一体…………」

窓の外で蛙の声が響き渡る。振り向くと白いレースのカーテンの向こうは闇の中。遠い空で雲に滲んだ朧な月が青くぼんやりと光る。今夜は雲に滲んだ朧月夜。

確かあの夜もこんな頼りない月夜だった。

唐突に蘇る数週間前の夜の記憶。あの時、最後に見た真澄の顔も先ほどと同じように大きな涙をぼろぼろとこぼしていた。

佐々木と別れたきっかけは真澄。

佐々木にとつての理由はやはり真澄がなびいてくれない事で翔子と付き合っている意味が無くなってしまったことかもしれないが、翔子が離れてゆく佐々木を追いもしなかったのは違う意味で真澄が原因だったのかもしれない。

きれいな真澄。可愛い真澄。その可憐さは女性の目から見ても魅力的な少女だった。翔子にとつて彼女はただその姿を自分のカンバスに映し取るだけで充分幸せにしてくれる存在だった。あの日真澄にスケッチブックの中身を見られるまでは。

真澄も見るともりはなかったのだろう。

しかし開いた窓から入ってきた風の悪戯がそれを開いて見せてし

まった。一つのページに幾つも幾つも描かれた真澄の顔、体のパーツ。

「何？ これ？」

ずっと絵に集中していた翔子は真澄の声にカンバスから顔を上げ、彼女が手にしているスケッチブックを見つけてさあっと血の気が引いた。

「見ないでよ！」

叫んで取り上げた時はもう遅く殆どのページをぺらぺらとめくって見られた後だった。

「翔子ってば、こんなのずっと描いてたの？」

そこにある絵のモデルが自分だったと知って急に興味が湧く。描きかけのカンバスを覗きに回る。

「見ないでったら！」

「えーやだ、すごい可愛く描けてるじゃない」

翔子の焦りは無視され、きれいに描き映された自分を見て喚声を上げる。

「いつから？ ねえいつから私の事描いてたの？」

興味深々に大きく開かれた魅力的な瞳でじっと見つめられ逃げ場を失った翔子は観念して答えはじめた。

「初めて真澄を見た時から……」

「それって、もう一年以上も前？ ずっと私の事描いてたの？ 酷

い内緒で描いてたなんてえ」

よほど嬉しかったのか、声が一オクターブ上がる。

「ごめん、黙ってて」

素直に喜ばれ照れた翔子は顔が赤くなる。こんなふう喜んでくれるならもっと早く正式にモデルを頼んでも良かったかも、真澄のはしやぎ声を聞いていると悪い気がしない。

問題はひとしきり騒いだ後、真澄がふつと言った一言だった。

「こんな絵ばっかり描いてるんだもん、佐々木さんに愛想つかされちゃってもしょうがないわねえ」

悪気はなかったのだろう。しかしそこに男の名前を出されて翔子はムツとした。

「佐々木さんとこれは関係ないでしょう」

「ええ？　だつてこれじゃあまるで佐々木さんより私のことをずっと好きみたいじゃない。きつとあの人、なんとなーく察知しちゃったんじゃないかなあ？」

「察知つて、何をよ」

「うんーだから、翔子が佐々木さんなんかホントは好きじゃなくて、つてことかなあ」

翔子はずきんと痛むものを胸に感じた。

それまで意識したことなどなかったが、心のどこかにそういう想いが眠っていたのかもしれない。事実、真澄を初めて知って「描きたい」と思ったのは殆ど一目惚れのようなものだったに違いない。

佐々木さんより私のことをずっと好きみたいじゃない

眠っていた気持ちが始まり上がり確かな気持ちになって体の中で形になり始めているのを翔子は感じながら、その成長を止めることができずに持て余しはじめる。

「そうよ、私きつと、真澄のことが好きなんだわ」

はしやぎ続ける真澄の瞳を捕らえて、真剣な目で告白した。

「私も翔子のこと、好きよ」

無邪気に笑つて答える真澄の態度に、心の中で何かが切れる。

「そういう好きじゃなくて……」

細い肩を抱き寄せて顔を近づける。柔らかい唇が乱暴に触れる。

翔子の急な変わり様に慌てて顔を反らす。

「待つてよ、女同士で、ちょっと、待つてよ！」

「何で真澄しか描けなくなっちゃったのか、何で他の絵が描けなくなっちゃったのか、私、真澄しか目に入つてなかったんだ。もう真澄にしか描きたい気持ちで湧かなくなっちゃったんだ」

一旦離れた唇がもう一度求めて近づいてくる。首を反らしながら嫌がつて拒否する真澄の頬を強引に両掌で押えつけ再び唇がふさが

れる。

真澄は小さな手を握り締め翔子の背中を叩きつけるが体格の違いとその非力さでびくりともしない。

「好きだったんだわ、初めてあなたを見た日から、ずっと」

翔子の唇がうつとりと囁きながら頬に、首筋に這うように動く。

「やめてよ翔子、こんなの変よ、おかしいわ」

自分の気持ちに気付いてしまった後はひたすら欲するモノを欲望のままに奪うのみだった。翔子の耳に涙声で訴える真澄の声は届かない。

「お願い、やめて、こんなの、気持ち悪い……」

喉の奥から甘酸っぱい嫌な匂いの塊がこみあげてきて、真澄はそれを耐えきれずに嗚咽と共に吐き出してしまった。固形物のないねっとりとした粘液が二人の胸元を濡らす。

「……気持ち悪い？」

ようやく少しだけ顔を離し胸に垂れる真澄の嘔吐物を指先でぬるりとすくいながら翔子が呟いた。

「そうよ、こんなの嫌よ。こんなの……気持ち悪い……」

ぼろぼろと溢れてくる涙を拭うこともできずにしゃくりあげる。

「気持ち、悪い……？」

脅える真澄の頬を伝う涙が月の光りを反射してキラキラと光りながら翔子の指先を濡らす。その濡れた指を自分の唇に当てそっと舐めながら体温がさーっと引いていくのを感じた。

そのまま指を真澄の首に回す。細い華奢な首は両手の指で輪を作るように囲むと軽く指先が余るほど頼りなかった。

「真澄は私が気持ち悪い……？ 真澄は、私を、気持ち、わ、る、い……？」

翔子の目が焦点を失い眼球が小さな点になってゆく。心の中で消失感と絶望が靄のように広がってゆき全身を支配して理性と常識に目隠しをする。少しずつ力の入ってゆく指先。

真澄の体は恐怖で固まり、鎖で巻きつけられたように抵抗もでき

ないまま力を失う。

やがてヒクヒクと動いていた喉も動きを止め、静寂が訪れた。

「思い出してくれた？」

懐かしい声にびくん、と大きく背中を反らし振り返る。が、そこには開かれた窓から湿った風が入ってきているだけ。その風に乗るようにまたふわふわと声が響く。

「翔子、私を好きだって言ったの、あの日。思い出してくれた？」

空気の中を漂う異様な気配に蛙も声をひそめてしまった。

「ええ、思い出したわ」

しばらく無言で立ちすくしていた翔子だったが、窓の傍に近寄り暗い雑木林に向ってぼつりと呟いた。

握り締めた真澄の首はすっかり冷たくなってしまい、硬く蒼くなってしまうたその顔を見つめながらまるで覚めない夢の中にいるようにふらふらと数日を過ごした。

学校もバイトも無断で休み、アパートの他の住人が仕事に行つてしまい人気のなくなつた時間に雑木林の奥へ入り込み二三日だけの日数をかけて少しずつ穴を掘る。

女の細腕でも時間をかければ小さな真澄一人が入る程度の穴は掘れた。

動かなくなつてしまった人間は動いている時よりもずっと重く抱えるだけで精一杯だったはずだが、どんな力が翔子に働いたのか、林の中に運び込み穴に寝かせ再び土をかけてゆくのに労した記憶が無い。

そして全てが葬られてしまったかのように過ぎ去つた夜だった。すっかり夢の中の続きのような生活に浸りきってしまった翔子はいつものようにカンバスに向かい木炭を手に取った。

「コーヒーでも飲む？」

翔子愛用の白いマグカップに褐色の液体を揺らしながら白い腕が現れた。

「真澄……いつの間に来てたの？ 玄関、空いてたっけ？」

非日常な日常が始まった。

「思い出したわ、すっかり。私……」

「良かった。思い出してくれて、良かった」

風は静かに姿無き声を運ぶ。

「ごめんなさい……私、あんな事するつもりじゃなかった……」

自分の気持ちに気付くことが無ければ、真澄にあのスケッチブックを見られ気付かれることが無ければ、きっといつまでもあの居心地の良い二人の日々は続いていたはずだった。

「後悔しても、誤っても、遅いんだけど……」

「……そうね……」

怒っているのか、許しているのか、まるで解らない硬質な声。

「私、どうすれば……」

両腕で頭を抱え込む翔子に温かい風が触れた。

「ねえ、こっちにきて」

誘われるまま窓を乗り越え暗い雑木林を目指す翔子の耳元に、クスとからかうようなあの懐かしい声が絡みつく。

「私達、やりなおせるわ。あの二人の静かな毎日を、繰り返し続けられるわ」

ざくざくと落ち葉を踏みしめ歩く。

「……そうね、続けられるわね……」

まるで夢遊病のようにふわふわと歩く翔子には張り出した小枝も気にならない。剥き出しの頬に、肌に小さなかすり傷をつけながら一点を目指す。

「私、毎日翔子の傍にいたわ」

「ええ。毎日来てくれたわ」



遠く暗い空から小さな雫が落ちてきた。朧月は姿を隠し、代りにぼつぼつと雨が降り始める。翔子がその場所に辿り付いた時には髪も服もじんわりと濡れていた。

だから翔子は気付かなかった。自分の頬を伝っているものが雨なのか、涙なのか。涙だとしたら自分の流しているものなのか、あの日指に触れた真澄の流したもののなのか。

「ごめんね、真澄」

ひざまずきその土を抱きしめるようにうつ伏せに倒れる。

「いいのよ、翔子。だってあなた来てくれたもの」

耳をくすぐる声が子守唄のように、唱えるように、翔子の瞼を重くしてゆく。

「この下で真澄、土に還るのね。でも独りにはしないから」

花が咲く。やがて、いつか。

翔子の意識が未明の底へと落ちてゆく。

二人の体がその場所から掘り起こされ遠く離れ離れにされても、翔子の真澄を想い続けた気持ちに種に、数日間そこで眠り続け土の中で同化し始めた肉体の一部を養分にして、きれいなきれいな花になる。

いつか。

静寂の夕闇に蛙の奇妙な声が戻り、雨は草花の咲き誇る日を急かすように振り続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0095d/>

---

いつか貴女の花になる

2010年10月8日15時53分発行